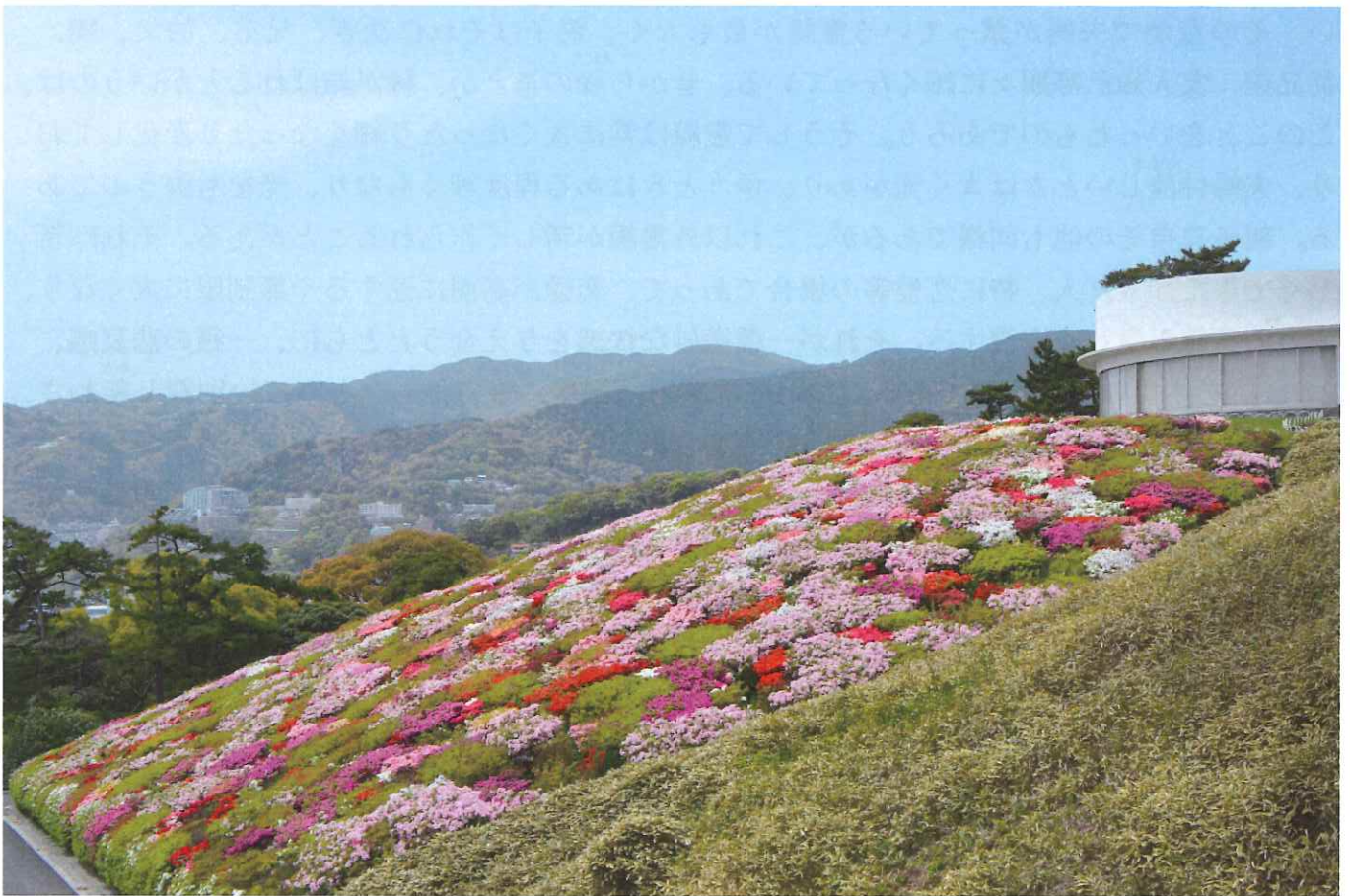




m i c h i



4

2023 No. 59

世界救世教 明主様と聖地に直結する会

霊線について

霊線、という言葉は今日まであまり使われないうである。というのは霊線というものの重要性を未だ知らなかったため、空気より稀薄な目に見えざるものであったからである。ところが人事百般、この霊線による影響こそは軽視すべからざるものがあり、人間にあっては幸不幸の原因ともなり、大にしては歴史にまで及ぶものである。故に人間はこの霊線の意義を知らなくてはならないのである。(中略)

ここに一個の人間がある。まず読者自身と思ってもいい。その自分は、自分に繋っている霊線なるものが、何本か、何百本か、何万本か、測り知れないほどあるものである。霊線には太い細いがあり、長い短いがあり、正もあり邪もあって、それが絶えずある程度の影響、変化を人間に与えている。故に人間は霊線によって生存を保っているといっても過言ではない。そのなかで夫婦が繋っている霊線が最も太く、親子はそれに次ぎ、兄弟、伯父、甥、従兄弟、友人知己等順々に細くなっている。昔から縁の糸とか、縁が結ばれるとかいうのは、このことをいったものである。そうして霊線は常に太くなったり細くなったり変化しており、夫婦仲睦いときは太く光があり、争うときはある程度細くもなり、光をも失うのである。親子兄弟その他も同様であるが、これ以外霊線が新しく作られることがある。それは新しくできた知人友人、特に恋愛等の場合であって、恋愛が高潮に達するや無制限に太くなり、両方の霊線が激しく交流する。それが一種微妙な快感を与え合うとともに、一種の悲哀感、寂寥感をも反映し合うのである。ついには霊線は極度に強力化し、とうてい別離し能わざるに至るのは右の理によるので、こういう場合第三者がいかにか説得しても何ら効果がないばかりか、かえって熱度を増すようになるのは誰も知る通りである。相愛はちょうど電気の陰陽が接触して電力を起こすようなもので、その場合電線の役目をするのが霊線である。(中略)他人の霊線は打ち切ることができるが、血族は打ち切ることができない。次に親子の霊線には注意すべきことがある。それは絶えず親は子を憶い、子は親を憶うので、双方反映し合っているから、子供の性質は霊線を通じて親の性質を受け入れることになるので、親が子を良くせんとする場合、まず親自身の心を良くしなければならぬ。世間よく親が道に外れたことをしながら子に意見をしても、あまり効果がないのはそのためである。(中略)

霊線は人間においては生きている親近者のみではない。死後霊界における霊とも通じており、正神に連結している霊線もあり、邪神に連結しているそれもある。正神は善を勧め、邪神は悪を勧めることは勿論で、人間は常に正邪いずれかに操られているのである。そうして霊界においてある程度浄化されたるものが守護霊に選抜され、霊線を通じて人間の守護をする。すなわち危難の迫れる現界人に対し、危険信号を伝えて救おうとする。この例として汽車などに乗車せんとする場合、時間が間に合わなかったり、故障があつたりして乗り損ね、次の汽車に乗る。すると乗り損ねた汽車が事故に遭い、多数の死傷者が出る等のことがあるが、これらは守護霊の活動によるのである。守護霊は現界人の運命を前知し、種々の方法をもって知らせようとする。(後略)

(「信仰雑話」昭和23年9月5日)



樵夫蒔絵硯箱 伝本阿弥光悦 江戸時代(17世紀) 重要文化財
MOA美術館所蔵

蓋表には、黒漆の地に粗朶(そだ)を背負い山路を下る樵夫を、鮑貝・鉛板を用いて大きく表す。蓋裏から身、さらには身の底にかけて、金の平(ひら)蒔絵の土坡(どは)に、同じく鮑貝・鉛板を用いてわらびやたんぽぽを連続的に表し、山路の小景を表現している。樵夫は、謡曲「志賀」に取材した大伴黒主を表したものと考えられる。樵夫の動きを意匠化した描写力や、わらび・たんぽぽを図様化した見事さには、光悦・宗達合作といわれる色紙や和歌巻の金銀泥下絵と共通した趣きがみられる。また、鉛や貝の大胆な使い方や斬新な造形感覚からは、光悦という当代一流の意匠家が、この制作に深くかかわっていることが感じられる。原三溪旧蔵

《目次》

代表挨拶	4
感謝奉告①	10
感謝奉告②	14
四月度聖地行事・春の芸術祭	16
春季大祭	17
感謝奉告③	18
シリーズ明主様(3)小学校の七年間	21
ブラジル信徒の信仰体験談	23
各地から活動報告	25
【21世紀を生きる】(7)	28

令和5年 課題

われよしの 心浄(きよ)めて ひとよかれと

祈る心は 神に通へる

「明主様の示された「道」を求め、まっすぐ歩む」

代表挨拶

西村 正資

大御業 おおみわざ 深き仕組 ふかしくみ は底知 そこし らず

只御心 ただみこころ のままに委 まか せよ

(昭和二五年三月一日 明主様詠)

四月一日、箱根聖地神仙郷では『春の芸術祭』、熱海聖地瑞雲郷では『春季大祭』が執り行われました。

瑞雲郷は、久しぶりの晴天に恵まれ桜花爛漫、天国の苑を思わす華やかな中での祭典となり、多くの参拝

者をお迎えいたしました。特に海外参拝団の皆様は、ヨーロッパ、ブラジル、スリランカ、タイから五一名、カメラを片手に嬉しそうに聖地を散策していらつしやいました。

大自然の生命輝く新たな季節を迎え、「明主様と聖地に直結する会」も、明主様にご縁を許された一員として迎えられていることへの感謝を申し上げ、改めて理想世界の建設に身も心も魂もお使いいただきたいと祈りをお捧げし、そのための精進をお誓い申し上げます。

また、混迷する世界情勢の緊張の中にも、個人が抱える厳しい浄化の中にも、すべての人々にとって夢や希望に満ちた世界が許されますよう、多くの参拝者と共に祈らせていただきました。

先日、WBC(世界野球選手権)で、日本チームの素晴らしい活躍に感動しました。絶不調の選手が、最後まで仲間から信頼を受け続け、最後の一番大切な場面で逆転勝利の結果をもたらしたり、親友である世界最高の打者と世界最高の投手が、大会の最後を締めくくる優勝決定シーンで対戦する「運命的出会い」等、漫画でさえ描けないようなドラマが、私達の心を大きく揺さぶり、熱い興奮を残してくれました。

そのドラマの中で、「弱気になってはいけない。ボー

の方に突き放ちます。慌て水難救助講習で教わったように背後に回り抱え込みましたが、少し勝手が狂い女性が私の身体の上に乗りに上げる形となり、私は沈み込み、呼吸のため必死に泳ぎ続けなければならなくなり、その内誰かが来てくれる”と待っていてもその心配がしません。次第に沖へ流され”もしかして、見知らぬこの女性と心中？”と絶望的な思いをしながら浜を見ると、遠くの浜辺で船を出しているのが確認でき”何とか時間さえ稼げば助かる”と希望を覚え、必死に泳ぎ続けました。しばらくして船が到着。仲間たちは彼女と男性を「大丈夫ですか？」と励ましながら、船上に引き上げましたが、しばらく私に気づいてくれません。ようやく引き上げられた私は、船底に横たわるしかありません。そして浜に着くと、救助された男女は船の仲間に「ありがとうございます」と大きな声でお礼を言い、走り去って行く気配がしました。船に残ったのは未だに起き上がれない私一人。お礼を受けた覚えもなく、助けたのか助けられたのか複雑な思いで、真つ青な空を見つめていた記憶があります。

それから二五年が経ち、私は長崎で布教していました。信徒の娘さんが、九州管区の警察関係者と結婚され、その夫君Iさんの故郷石垣島で身内の方々の入信希望があり、私は出掛けて行きました。無事入信式も終わり、家族の方から「この海は綺麗ですから是非

行つて見て下さい」と勧められ、海岸へ行きました。そこに立った時思わず「ここだ！」と叫んでしまいました。

私が溺れる人を目の当たりにし”救助したのかされたのか”の川平湾（観光名所）だったのです。それを思い出し「おひかり」を戴かれた伯父さんに、二五年前の話をして、当時船を所有していた方を尋ねました。すると「それは自分かもしれない」ということが判明し、二度ビックリ。その衝撃的出会いの感動は、今も忘れられません。

私は人生七四年、今日まで溺れる人を間近にしたのは、その時一度限りです。しかも、その出来事の一〇日程前に水難救助の資格を取得していたこと。この時期が逆では成り立たない出来事なのです。それから二五年経つて、助け船を出してくれた漁師に、長崎から出掛けた私が「おひかり」をお掛けし、明主様とご縁を結ぶことになったのです。皆様は、果たしてこのことをどのように理解されるでしょうか。

『大御業 深き仕組は底知らず 只御心のままに委せよ』

明主様を一途に見つめ、お役に立たせていただきたいと集った聖地直結の会の皆様やその周囲でお支え下さる多くの方々、また、その活動の先で出会う方々、そして起きてくる出来事等々、すべて深い神様の仕組

み（ご意思）の中での出会いであり、尊いものであるとあらためて自分に言い聞かせています。

おそらく、気づくかどうかの違いで、日々のすべてがその表れなのでしょう。そうであるならば、身辺に起きてくることのすべてに、良い向き合い方を模索していかなければなりません。そうすることによっていつの日か、そのまま自分の人生に、返ってくると思えるからです。

“人を選ばず、機会を逃さず、何事もありのまま受け入れ、真正面から向き合い行動を起こす”ということが、お歌『只御心のままに委せよ』ということではないでしょうか。



執務棟上の藤棚(4月12日)

機関誌『道』三月号の感謝奉告より学ぶ

田川布教所のSHさんの感謝奉告ですが、平成二九年に胸腺腫という病気で厳しい手術を受けられ、その後の検査で右の肺に、そして左の肺にと転移が確認されたため、抗癌剤治療を勧められたそうです。できればその治療を避けたく、転院しましたが、そこでも抗癌剤治療を勧められました。

“この病気になってなにか意味があるのかな？”と考へはじめ、治療を「前向きに考えてみます」と医師に伝えた直後から流れが変わりました。担当医師が交代、経過観察しながら様子を見る”という方針に変更となり、無事今日を迎えていらつしやいます。

「不思議と自分の心も穏やかになり、愚痴も言わなくなり、主人に対しても素直に“ありがとう”の言葉が多くなった」と報告され、「そうなれた自分が“うれしい”」と語られています。また、夫君も信仰への理解が深まり、協力的になってくれたと喜びを語っています。「明主様の信仰に出会わせていただいたことが一番のご守護」というご報告でした。

ご自分の心の向きを「この病気になってなにか意味があるのかな？」と、恐らく明主様の目線（み教え目線）に切り替えられたのでしょうか。そして、厳しい病

気ですが、この「病」と出会ったことで自分を顧みることができ、結果、夫婦の仲も好転することになりました。まさに前述の「すべての出会いに神様のご意志がある」ということにも繋がります。

病のみを見つめる孤独の苦しみから、「明主様がなされるようにお任せしよう」という自我を超えた心の広がり、次には運命の広がり繋がったように感じるので。

「他人の心より、自分の心が思うようにならない」と感じることはありませんか。治まりがつかない自分の心に、どれだけ多くの方が苦しんでいることでしょうか。自分の心のあり様が、運命の分かれ道になっていることって意外と多いのではないのでしょうか。

自由にならない心を治めるには「力」が必要です。それが浄霊であり、み教え拝読です。崎山さんの幸せ感と運命の転換は、その努力から許されているように思います。

東大阪グループのNMさんの奉告です。信仰仲間の「感謝箱」への取り組みに感動されたお話です。

信仰仲間のNT氏は、名古屋にお住いの子息から事業や私的な問題の相談を受けた時、いつもの確な回答を与えつつ、最後に必ず「すべて浄化と受け止め、祈りお任せすることが肝腎だ」と伝え、そしてご自分の

体験から「献金奉仕」を通してご守護をいただいていた確固たる信念を教えたそうです。

子息は、父親から教わった取り組みを自分でも決意しますが、住まいの近くに教団の施設は無く、自分で考え、日々心を込めて感謝箱にお捧げすることを続けられ、先日真心の籠った感謝をお届けになりました。

人の執着や欲望の象徴とされる金銭を、それを上回る「感謝」という誠に代えてお捧げになる。誰に約束したわけでもなく、ご褒美がある訳でもなく、途中で止めたり他に転用しても問題もないのですが、それを何年もコツコツと実践されてきた姿に、NMさんは感動されています。

子息は、「やらないと気持ち悪く、感謝箱に気持ちを託すことでスッキリする」と、成長されていました。おそらく、その取り組みで、確かな「力」の存在を感じられたのでしょうか。

父と息子、この関係は一般的に難しいと言われています。おそらくお父さんは、み教えを語るのではなく、み教えを実践して得た「体験」を伝えて来られたのではないのでしょうか。体験は理屈ではなく事実ですから、素直に聞けます。また、その言葉の背後に感謝の想念が籠っていますから力が有り、聞く者の魂に心地よく響くのでしょうか。

み教えは、知識を得るためにあるというより、自分

の内面や生活の質を向上させるためにあると考え、特に家庭内では「後ろ姿」で示すという心意気を持ちたいものです。

沼津グループのTEさんの奉告です。妹さんが嬉しそうにしていたので、自分もそのようになりたいと尋ねたところ「明主様の話や信者さんから話を聞いて変わった」と知り、それから自分も参拝やみ教え拝読を行うようになったそうです。その後、何とも思わなかった富士山が美しいと感じたり、草花や月や雪景色を見て美しいと感動するようになりました。そして、すべてに亘って積極的な性格にも変わったそうです。

何らかの理由で閉ざされていた心の闇に、光明が射しこみ、周囲の様子や関わる人たちの優しさを感じられるようになってきたのですね。恵美さんの喜びが伝わってきます。

背後では、お母さんが長い年月、彼女のことをしっかりと祈願されていたようです。明主様に対する絶対の信仰で、積極的にご奉仕されている方ですから、そのような信仰に至った歩みを、再度丁寧に聞かれても学ぶべきところが多いと思います。また、お父さんも物言わず、静かに祈つていらっしやたのではないでしょうか。見えない、聞こえない、そうした中にも自分に向けられた大きな愛情が存在することを見逃すことは

できません。

良く知っていると思うご両親のこと。でも近すぎてよく見えていないことも案外あるものです。新たな出会いを意識してみませんか。自分の成長にはとても大切なことだと思います。

冒頭でも申し上げましたが、社会は新たな年度に入りました。新しい流れには、新しい人との出会いやさまざまな出来事に触れ合うことが伴います。それも深くたどれば、私たちを幸せに導くために「成長させてあげよう」という、神様の深い愛から発せられた出会いや出来事なのだと信じます。そして、そのすべてが、いつの日か「縁」を辿るように自分の人生に再度引き寄せられて来ているのでしょうか。運命は活字の如く、命が運ぶもの。つまり、自分が創り出すものと、明主様は教えて下さっています。

私は、良い出会いを求めて、ジツとたたずむのではなく、自ら大いに行動していきたくないと決意いたしております。

どうぞよろしくお願いいたします。

感謝奉告 ①

土佐みろく教会から感謝の奉告が届きました。コツコツ浄霊実践してきた四編からなる記録です。

「明主様のお役に立ちたい」一心で

土佐みろく教会 H H

その一 すぐ祈願、即浄霊で奇蹟が

ある日、電話が鳴りました。それはめずらしく神戸の姪からでした。姪は思いつめた声で「助けて！夫が何万人かに一人という神経を侵される難病にかかった」と私に伝えてきました。姪はとっさに私のことを思い出し「パワーを送ってちょうだい」と継る思いの電話だったのです。姪の夫、Yさんはとても健康に気を配っていた方で、毎朝写経をしたり、早朝一万歩を目標に、雨の日も風の日も休まず実行される方と聞いていたの、大変驚くしかありませんでした。

昨日まで元気だったYさんが、朝、目覚めると手足に不調を訴え、急いで近くの病院に歩いていくことができず、医院に着いたときには、ほとんど歩けなくなり、みるみる病が進行していくのが分かったそう

です。医者も「これは？」と思われたのでしよう。すぐ神戸大学附属病院へと連絡してくださり、診察の結果、「半身不随、寝たきりの生活になります」と辛い言葉でした。それで姪は、藁をも継る思いで私に電話したとのことでした。住所、入院先はどこで、何階の部屋でとできるだけ具体的に聞いて、明主様にお縋りし、お助け願うことをご祈願し、同時に私の手は神戸方向へ祈りを込めてかざし始めていたのです。七二歳の姪は、さぞかしと思ったことでしょう。私は、「よくぞ電話をしてくれたものだ」と感謝しました。一日に何度も浄霊を取り次ぎました。翌日、姪から元気な声で電話があり、「はて？」と思いました。神戸医大の先生から「大丈夫です。すぐに歩けるようになります」と意外な言葉があり、「医大としては内科的な処方は終わりましたので、リハビリの方に移るよう」とのことでした。天地がひっくり返ったような心持で、胸をなでおろしたそうです。

Yさんは落ち込んでいたのが、急に前向きになり、リハビリにしっかり取り組む意欲が湧き、不思議なことの連続にただただ驚き、思わず、「神様ありがとう」と言ったそうです。

姪は「あまり、夫のことを気遣わなかったことを反省し、今、かけがえのない人と気づかされ、もっと愛情をもつて接していこうと考えました」とのことです。



浄霊のおばあちゃんことHさんとYさん

Yさんの姉妹は何かにつけ姪を軽んじていたらしいのですが、姪はそれをあまり気にはせず、岐阜にいる夫の母親の世話にも何度も往復していたのを、以前から耳にしていました。その姉妹と不仲だったのが、一転して大変良くしてくれるようになったそうです。今までのことが嘘のように、瞬時に消えたのです。それが何よりも嬉しいと電話がありました。Yさんもあと一ヶ月で退院が許されると希望に満ちています。夫Yさんの病により、大浄化が起きたのでしよう。

明子様、大きな奇蹟をいただきました。明子様との直結をお許しいただき、心から感謝申し上げます。

心癒す花あり、音楽あり、ストレスの解消目指し、

この南国高知に美と健康の館を建てたいと願い、念じつつ御用を続けています。明様の本当の幸せな天国を目指された思いに大いに活躍しなければと、我が青春として働かせて下さいませ。

その二 我が家は浄霊広場

私の友人は未信者が多く、家によく来られます。来られた方には必ずといっていいほど、ご浄霊をお取次ぎしています。皆、素直に受けて下さいます。腰、手足の痛い方が多くおられます。浄霊のことは知らないのは仕方ありませんが、少しずつ理解していただければとお話をします。

例えば、これは自然の法則で、浄霊は太陽の光です。痛くもかゆくもないでしょう。熱いと感じる方もあります。幸せになる元です。朝日をしっかりと浴びましょう。だんだん、美男美女になり、健康になります。等々、なんとなく来られる方が元気になり、ふっくらとしたお顔になっていきます。

友人で七五歳の女性Kさん、しばらくぶりに来られました。なんと二五年ぶりになります。

三〇年程前、胃ガンで大部分が切除され、やせ細っていたKさん。相変わらず細身、一人暮らしだそうです。「胃の方はどう？」と聞くと、「胃ガンは再発もなく生きてきたけど、今度はつい最近、乳ガンを患って、

片方を全摘手術を受けた。生活を支えるために働かざるをえないのよ」と嘆いていました。どうか、幸せに元気に働けますようにと手をかざしました。それから、時々来られ「これして」と手をかざす真似をします。「ハイハイ、どうぞ」と家の中へ招き入れます。早速、浄霊を三〇分間させていただきます。最近をよく食べれるようになったと若返られました。

他に、家族で来られる方もあります。母親(信者)は、無農薬野菜の栽培に精を出されている方です。その子供、姉五〇歳Hさん、妹四八歳Tさん、姉の子二〇歳男子、四人連れで来られます。その度にご浄霊をさせていただいています。皆さん曰く、私は「浄霊のおぼあちゃん」です。それぞれ持病があり、姉のHさんは、眼の痛みで二ヶ月仕事を休み、結局、医大まで診察を受けに行かれましたが、原因が分からず、見放された状態でしたが、この三月から仕事に戻ることができています。

妹Tさんは糖尿病の悪化で二〇日間入院を余儀なくされました。退院後も体調思わしくなく、めまい、吐き気、下痢、腹痛を繰り返す状態に陥りました。なんとかしなければと思い、土佐みろく教会にご祈願をお願いし、Tさん本人は念のため、耳鼻科で診察を受けました。

その結果、「耳の神経が圧迫され、脳につながる血管

に影響があり、めまいを起こす」とのことです。一週間分の薬をいただいて様子を見ることになりました。そして、別の大病院でMRIの検査もしたが、脳には異状が無いとの診断でした。この件を土佐みろく教会に報告したところ、先生からは、「度々ご浄霊をいただくこと、自己浄霊も必要なので本人が『おひかり』をいただけるようにお導きすること」とのご指導がありました。

私自身三七歳の時、大浄化があり、それがきっかけで入信を許され、五〇年になります。数知れぬ未信者さんに接してきました。残念なことに半分もお導きできただりょうか。浄霊、自己浄霊のすばらしさは身に染みておりますだけに、明主様、これからもますます、み教え一途になり従い、人救いに専念したく願います。感謝。

その三 福岡の友人(女性八四歳)に遠隔浄霊

夫が亡くされたのを機に四〇年ぶりに電話交際が始まりました。現況は、足、腰、動悸と余命幾ばくもないとの嘆きの言葉を聞きました。独りになられて、さぞかしお淋しい毎日が続いているのでしようと、私は元気になられるようにと励ましの電話を度々させていただきます。当然、黙って、その都度、遠隔浄霊に取り組みました。友人から連絡毎に「お蔭様で」と感

謝の言葉が聞かれるようになり、大変前向き、プラス思考に心が変わって、「少しずつ楽になった。外出もできるまでになった」との事でした。それまでは毎月定期の動悸の診察があり、結果はいつも思わしくなく、血栓があり、数値も高く、医者も慌てた様子だったそうです。「明朝八時に電話をするから、すぐ来院してください」と言われ、家中の片づけをして待っていたのです。ところが、一日中待っても電話はありませんでした。電話がないということは入院するほどの異状がなかったのだと受け取めて、胸をなでおろしました。それ以来、数ヶ月が経ちましたが、診察の結果は、医者も驚くほど数値が平常になっていたそうです。

その時、私はパワーを送っていたことを話しました。神様のご守護についてもお話しできました。お導きについてはお話できていません。明主様どうか、この友人が楽しく平和な毎日が送れますように、まだまだ長生きできますようにご守護くださいますよう、心からお願い申し上げます。

その四 未信者に喜ばれた遠隔浄霊

高知県春野に住む義弟は、数年前から胃ガンを発症、最近では肝臓ガンを患っています。それも進行性のものです。「高知医療センターでしばらく治療をしていましたが、もう手の施しようもないので、あとはホスピス

にと医者に言われ覚悟しました」と久しぶりに訪ねてきた義弟は、姿も一見して見間違いかと思うほどやつれ、年寄りのようになって、やせ細っていました。

一時間ほど、今後の事など話をする間、明主様のお話をさせていただきましたが、「もう色々聞いたが結構です」と言われました。ただ、遠隔浄霊をさせていただくことについては、「どんどん頼みます」との言葉をもらい、嬉しさで、思わず「明主様」と心の中で叫びました。

浄霊はそつとさせていただきました。遠隔浄霊も続けました。「明日はホスピスの予約をしてくる」と言って帰っていきました。二日ほどして、私の長男(大阪在住)も急いで帰郷して義弟に会いました。その時、驚いたことに、ホスピスの医者曰く、「急に入院することはありません。ガンの良薬ができたので、以前のように治療を始めてください」とのこと。弟は、「本心ホツとした」そうです。今は家で療養中です。明主様、また奇蹟をいただきました。心から感謝申し上げます、なお一層努力し、余生をひと様のために捧げてまいりたく存じます。

感謝奉告 ②

献金のご奉仕に関する体験記が2件寄せられました。

献金奉仕の体験記1

「空気御礼」という感謝

大阪グループ N M

私が高校生の時の体験です。小児喘息の浄化で小学四年生まで激しい発作が続いていましたがご守護いただき、この頃から発作も起こらなくなっていました。

ある専従者から「浄霊実践の御用に出かけていただきたい」とお誘いいただきました。対象の浄化者は、大阪市港区に居住されるGさん。中年の女性でした。気管支喘息で大変厳しい浄化ということでした。私も同様の浄化にご守護いただいていたので、行っていただきたいと言われたのだと思います。ところが訪問当日、その専従者が「教会に用事が生じ行けない。一人でも行ってほしい」と、住所と簡単な地図を渡されました。躊躇していると、直ぐ交通費を渡され、行かざるを得なくなり、不安ながら出掛けました。行ってみれば心配するまでもなく、迷うこともなく訪問出来ました。

Gさん宅に着き、一人で訪問することになった事情をお話して、ご浄霊のお取次ぎしました。浄霊が終わり帰ろうとすると、「まあお茶でもどうぞ」と言われ、遠慮しましたが断り切れずいただく事になりました。

このような状況は、初めてのことで戸惑いでしたが、有難くいただくことにしました。出されたお盆の上にはお茶とご浄霊御礼と別に半紙に包まれて、表に『空気御礼』と書かれた封筒がありました。怪訝に思いましたが、Gさんは「月末までに参拝が出来ないので、お使いして申し訳ありませんが布教所へお届け願いますか」との事でお預かりし、先生にお渡しいたしました。先生は「ご苦勞様、御用がいただけで良かったですね。機会があればこの次もお願いしますね」と労って下さいました。そこで、私が怪訝に思った『空気御礼』その意味を先生にお聞きしました。「Gさんの浄化は大変厳しいもので、発作が起ると息苦しく呼吸さえ困難になり、それはそれは見ている者でさえ辛いものです。浄霊をいただくとその都度、必ず楽にしていたら、何とか乗り越えてこられ、今は軽い発作が季節の変わり目に少し出る位までなられました。そうなってみると、普通何気なく呼吸でき、息ができる事がいかに有難いか、この空気の存在がいかに有難いかと思われて、感謝と喜びを込めて真心の献金『空気御礼』をお許しいただいておられるのです」と教え

ていただきました。なお、今日まで相当の期間継続されておられることも知り、明主様信仰とはこういう事かと臆気ながら気づかせていただきました。感謝献金の尊さにあらためて感銘致し、貴重な体験となりました。心より感謝しております。今後も益々、み教えを学び、求めて、御用を通して信仰の向上に努めさせていただきますと思います。

献金奉仕の体験記2

一 割献金の継続実践

四〇年前に就職して、初任給をいただいた時から今日までずっと一割奉仕を継続されてきている女性信徒さんについて報告させていただきます。

一割献金のキツカケは、初任給を両親に小遣いとして若干お渡しされたことだそうです。その時、お父様が、「嬉しくて有難いことだけど、これを献金したら」と娘さんに言われたそうです。既に娘さんには献金の話を受け入れる信仰姿勢があったから言われたようです。お父様は今日まで一割献金を継続してこられた経緯を話されました。きっかけとなったのは、学生当時、京都池畔亭で行われていた学生錬成会に参加され、講師の教会長先生より、社会人となった時の心構え、信仰心の培うためには等の講義があり、その中に給与の

一割の献金についてのお話があったそうです。「これは飽くまでもの話ですが、仕事を続けている内、必ず多少の不平不満が出てくるもので、また会社の待遇に対する不満もあるもので、それやこれやを考える時、就業中に一割くらの曇りを作っているはずです。それらに対してお許しいただき、懺悔の気持ちで一割の献金を心がけて欲しいものです」とのことでした。お父様は「そうだ」とスーと何の抵抗もなく受け入れられたそうです。その後、お父様は就職されて一割献金を続けられ、リタイヤされた現在も献金を続けておられます。乗り越えがたいと思われる厳しい浄化も、何度も乗り越えられてご守護いただかれておられます。その話を聞かれて娘さんは献金を決意され、今日までずっと一割献金を継続されておられます。お父様の献金に対する信仰姿勢を見ておられたからだと思います。

娘さんも「今まで転職もしたし、結婚、育児等の節目の時でも、素晴らしい方向性にご守護をいただいた事は、一々言葉で表す事が出来ない程で、常に感謝の心で一杯です」と話されています。

両親から娘さんへ信仰の伝承もさることながら、今日まで営々と感謝献金のみではなく参拝・浄霊・奉仕の御用も連綿と継続されている事は、何物にもかえ難い事だと思ひ報告させていただきました。

四月の聖地行事



箱根神仙郷の建設の進捗と観山亭修復着手の奉告がなされた

春の芸術祭(箱根)



奉獻されたカーネーションとカラー。春の芸術祭の参拝席は、ほぼ満員に

“共に活動を進める協力者から、理想世界建設の使命を果たす存在に、と
いう雛型観に基づいて、明主様のみ教えを展開している東方之光

四月の聖地行事

春季大祭(熱海)



本格的春の訪れる中、病貧争なき世界創造の為、魂の向上を誓う祈りが捧げられた



海外参拝団を迎え、活気ある祭典となった。賑々しく営まれた春季大祭

『新人たれ』のみ教え— “魂の向上、を目指し、人を思い慈しみ、人格の向上に重点を置いて取り組むいづのめ教団

感謝奉告 ③

借金完済、悲願のお墓建立 そして姉からの言葉



九州合同月次祭でのHさん

古賀集会所

H A

以前、借金完済の感謝奉告をさせていただきました。ことに對し改めてお礼申し上げます。今回はその後の出来事を奉告させていただきます。

借金は無事返済できたのですが、私にはもう一つ成し遂げなければならぬことがありました。それは、平山家のお墓を建てることです。私の祖父母と両親の遺骨は北九州市八幡西区にあります吉祥寺というお寺に、祖母が亡くなった時から遡りますと五〇年近く、預けっぱなしだったのです。このことを知ったのも、入信をお許しいただいてすぐの頃です。

借金も完済し心配事が一つ無くなったということ、小澤さんや佐藤さん達の協力のもと、早速お墓建立へ動き始めました。費用はすでに貯まっていたので、霊園に、石材屋さんに、必要な書類の取得に役所に、吉祥寺の住職さんと連絡を取り日程の段取り、そして姉への連絡もしました。

ここで少し、姉について話させていただきます。姉は私より八つ上で、小さなころから活発で友人も多く、それでいて頭も良く絵や楽器の演奏も得意で、私にとって自慢の姉です。ただ、私が小学生で、姉が高校生の頃に母が亡くなり、その頃から少しづつ家庭がおかしくなっていくように思います。姉は進学も就職もせず、遊び歩くようになりました。その後しばらく音信不通だったのですが、私が高校卒業する時に再び連絡を取るようになりました。現在は宮崎で息子と二人暮らしをしています。お墓を建てるための連絡をした時は、とても喜んでくれました。

お墓建立は想像以上にやる事が多く大変でしたが、辛いとは全く思いませんでした。〃なんやかんやで一年くらいはかかるのかな?〃と思っていました。周りの方々の協力、そして神様が後押しして下さったのでしよう、約三ヶ月ほどで準備が整い、納骨までたどり着くことができました。

無事に納骨式も終わり、住職さんをお見送りし、姉と私だけになった時、姉は私にこう言ってきました。「普通の人には絶対できない、本当に良い経験ができたと思う。ありがとう」と、私はどうしても昔の遊び歩いていた姉のイメージが強かったので、この言葉を聞いた時は嬉しかった反面少し驚きました。もしかしたら神様が私を通して、姉にもご守護を授けて下さっているのかもしれない。ご先祖に祖父母、両親もこれで漸く一安心したと思います。これからは私と姉を霊界から見守ってくれば良いなと思います。

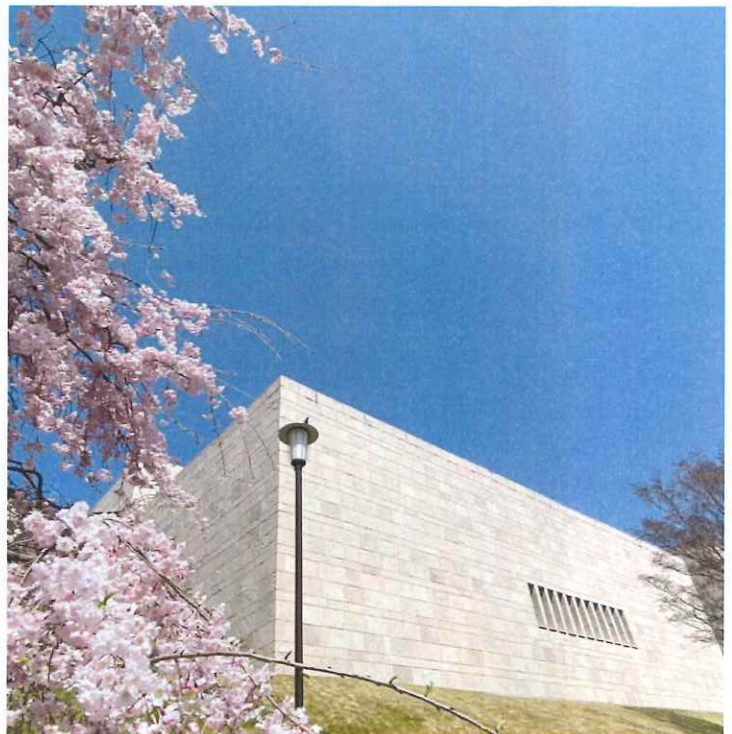
お墓も建てられて心配事が無くなった今、私は毎日有意義に過ごさせていただいています。恥ずかしながら貯金も人並みにはできるようになり、職場の上司の影響で釣りも始めました。これからは日々の感謝を忘れずに生きていくのと同時に、今後もし同じような境遇の方が現れたら、この信仰に導いて助けてあげられるような人間になりたいです。

ありがとうございました。

MOA美術館の桜



相模灘に望むムアスクエア

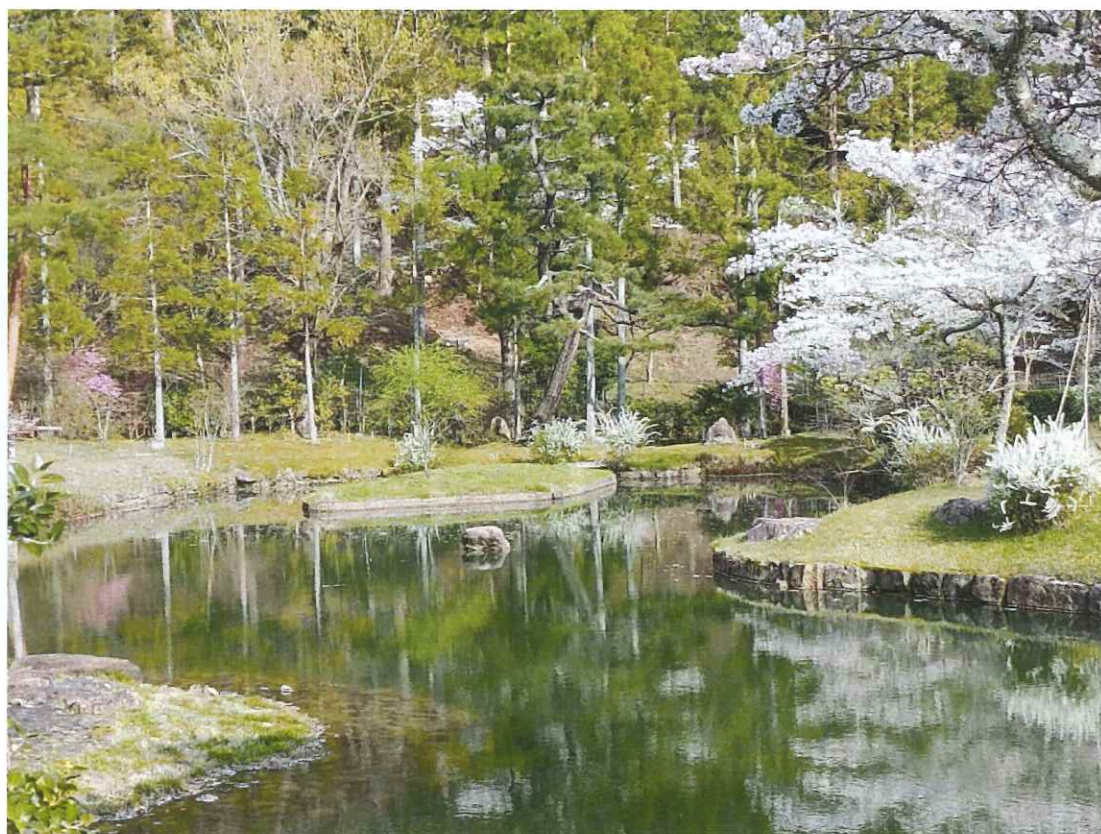


青空とインド砂岩に映える満開の桜

サクラを愛でる平安郷



優雅に咲き誇る枝垂桜(3月末)



池面に揺れるのどかな桜のたたずまい

シリーズ 明主様(3) “小学校の七年間”

(前略)明治一〇年代から二〇年代にかけ、近代的な国家としての形態が整えられていった時代に、教育制度の整備、充実がその重要な施策の一つとして図られたのである。

多くの公立小学校が新設されたばかりでなく、江戸時代以来の「寺小屋」とか「私塾」などまで、公立、私立の小学校として次々に公認された。そのために明治初期の小学校の増加ぶりは大変なものであったという。

私立の小学校の中には、一人の先生が自宅の一部を教室とし、一つ教室の中に何組もの生徒が同居しているといった、いわば寺小屋式の学校も多かった。教祖が初めて入学した日新尋常小学校は、現存している「小学校設置願」という記録によれば、「敷地二五坪、生徒五〇人、教員一人」とあり、これによって、おおよその様子がわかるというものである。(中略)

明治二二年(一八八九年)一月、六歳の年に教祖は浅草山谷町の私立・日新尋常小学校へ入学した。この小学校は、先に触れたように、その年の七月に「小学校設置願」を提出しているので、入学のころはまだ寺小屋式の私塾であったと考えられる。その年のうちに認可がおり公認の小学校となったが、その時点で教祖は二年に進級したようである。これは、翌二三年(一八九〇年)春の修業証書に「第二年

修業ヲ證ス」とあり、またその前年九月一六日に「学業勤勉併ニ其筆跡ノ優美ナルヲ賞ス」という賞状も残っている。二、二年編入は学業優秀なるによって特別に扱われたものと推察される。

このころの小学校では、修身教育(生涯の身を修める道徳教育をさす)をとくに重視し、教科書としては文部省が刊行した、『小学校修身訓』が使われた。その第一頁には、「玉磨かざれば器を成さず、人学ばざれば道を知らず」という中国の古文献『礼記』から引用した格言が記されていた。昔は、繰り返し朗読して暗誦する教育法がとられていたから、おそらく教祖も、この言葉を心の奥深くに強く焼き付けたことであろう。

また、現代の教育施設などから見れば当時は比較にならぬほど貧弱ではあったが、その不備を教師が熱意で補った。一人一人の生徒に愛情を注ぎ、心を通わせあい、人格によって生徒を感化し、天分を伸ばす、いわゆる全人教育が行なわれた。それゆえに、この時代に、人間としてのスケールも大きく、視野の広い、大局を見通せる人材が多く輩出したのはけっして偶然ではなく、こうした教育に因るところが大であったと考えられる。

「小学校令」で義務教育がうたわれたものの、民衆はまだそれほど教育を重んじていなかったし、法令そのものの拘束力も、徹底を欠いていた。近代教育の揺籃期にあつて、形としての制度は急速に整えられたものの、これに対応す

る国民の实情、また、近代教育の必要性に対する理解度との間には大きな隔たりがあった。そういう一般の趨勢の中で、貧しい状況の岡田家が、進んで次男坊である教祖を小学校へあげた両親の心づかいには、並々ならぬものがあったことと察せられる。日新尋常小学校の月謝は二五銭以上、五〇銭以下と定められていた。蕎麦の盛り、かけ一銭、米一升（一・五キロ）五銭四厘といった物価を思いあわせる、その金額は決して小銭ではなかったはずである。この両親の愛情を、自己一身への期待と感じとつてのことであろうか。教祖は橋場の自宅から小学校まで片道二〇分はかかる田舎道を毎日通つて、学業に励んだのであった。

（中略）明治二二年（一八八九年）五月、岡田家は橋場から浅草山谷町へ移った。ここは日新尋常小学校のすぐ近くなので、通学には都合がよかった。ついで二四年（一八九一年）十一月、今度は千束町へ引っ越すことになった。ここは浅草寺の北西三、四町（約三五〇メートル）にあたり、現在の浅草三丁目である。これを機として、教祖は浅草尋常高等小学校へ転校することとなった。

浅草尋常高等小学校は、明治初年、浅草寺にほど近い、浅草田島町誓願寺内に設けられた私塾として出発したものである。後に校地を移転し、教祖が転入学したころには浅草寺に近い浅草区馬道町四丁目一九番地（現在地、台東区花川戸一丁目一四番）にあり、「東京府下五校の一つ」とうたわれた名門校であったのである。（中略）

教祖が入学したころの浅草小学校は、煉瓦造りの二階建校舎が新築されたばかりであった。普通の小学校はといえ、おおむね木造平屋建であったので、当時としては大変立派な校舎であったといえよう。

明治二九年（一八九六年）三月に高等科を卒業するまでの四年半、教祖はこの小学校で学んだが、その間の成績は抜群であった。当時、成績優秀の生徒に対しては、学年の途中で教育会（今日の教育委員会にあたる）から賞品が、また、学年の終わりには区長から優等賞状が授与された。

（中略）

一年特進の後、名門校へはいったにもかかわらず、引き続き右のように優秀な成績だったことは、教祖の明敏な頭脳を証明するものであるが、天は二物を与えずの諺のごとく、幼児期以来の病弱はずっと続いていた。

そのころのことを、教祖はつぎのように記している。「十二三歳頃迄は、腺病質の所謂虚弱児童で、薬餌に親しみ通しであった。それでも小学校だけはどうかやら終えたが、子供乍らも、他の健康児童をみると実に羨しかったものである。然し不思議にも学校の成績はよく、大抵主席か二番より下らなかつた。」

（次号へ続く） 『東方之光』（上巻）より

神業奉仕こそ最高の先祖供養

アンナ・カロリーナ・ジラス・デ・マツトス・マルテ（女性）

皆様、おはようございます。アンナ・カロリーナ・ジラス・デ・マツトス・マルテと申します。結婚して、三歳になる息子がいます。

二〇二〇年一月に入信が許され、現在はサンパウロ州内陸部のバウル教会に繋がるマリリア浄霊センターの青年部で、責任者を務めさせて頂いております。

本日は、明主様と出会い、ご浄霊を知ってから私に許された幾つかの変化について皆様にお話しさせて頂きたいと思えます。

私は一四歳の時、火事で母と継父を亡くしました。親を亡くしたこと、しかもその原因が火事だったことに私はひどく苦しみ、精神的に激しく動揺しました。

霊界の親を供養しなければいけないと強く感じながらも、霊に関する知識が乏しかったせいで何をしたら良いかわからず、「自分が苦しまないことが何よりの供養」とばかり考えていた私でしたが、今思えばそれを口実に、私はただ自分の感情を抑え込もうとしていただけでした。

どんなに頑張っても、二人のことを深い苦しみや悲しみを抱かずに笑顔で思い出すのは至難の業でした。二人を救えなかったという自責の念が心から消えなかったからです。（私のそうした感情はきつと親を苦しませていたに違いありません）

そしてそうした自責の念がウツ、不眠、不安障害、パニック障害、自傷行為や自殺未遂などといった様々な精神的浄化を引き起こしたため、私は数年間心理療法を受けました。

二〇一七年、長男が誕生した頃には精神的に少しは回復していましたが、母に孫の顔を見せてあげられなかったことや母と会えないことを思うと、とても心が痛みました。

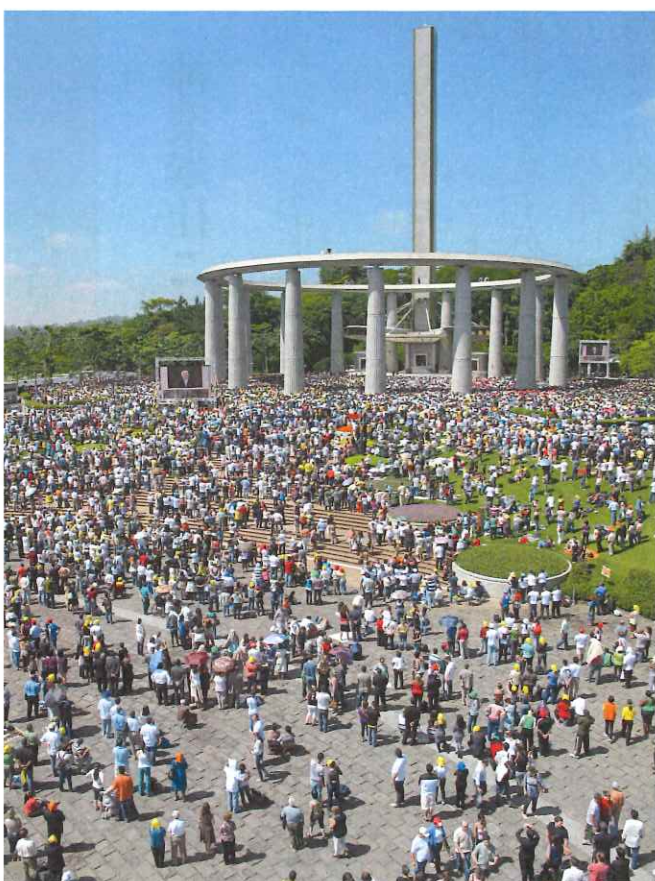
そうした頃、救世教に通っていた親友が私の苦しみを知り、浄霊を勧めてくれたことをきっかけに、二〇一九年一月、夫と初めて浄霊センターを訪れました。そして、センター長に應對していただいたその日から熱心にセンターに通うようになった私は、世話人の方のおかげで、感謝献金や御教え拝読、月次祭参拝といった救世教の信仰実践を始めるようになりました。

こうして信仰の第一歩を踏み出すことができた私は、日毎益々強くなっていく自分を実感すると同時に不眠症にも悩まされなくなり、憂鬱な感情は感謝の気持ちにとって代わりました。そしてその結果、与えられるだけの側から与える側の人間になりたいという強い願いが芽生えたのです。

そうして私は、人に尽くしたい、一人でも多くの人に明

主様の御教えと浄霊を伝えたいという思いで入信を決意し、二〇二〇年一月三〇日、夫と共に「おひかり」を拝受いたしました。またその後すぐ祖霊祭祀を申し込み、自宅で救世教の信仰実践に取り組みようになった他、教会の内外で御用奉仕に励むようになりました。

更にそれから程なくして、私はセンターに通って来られる方々のお話をするという御用を頂きました。浄霊を通じて人救いのお役に立つお許しを頂いたことが嬉しくて一生懸命その御用に励む中で、自らに与えられた使命の重大さも日に日に理解していきました。そうして昨年是一年を通じて一名の方に明主様をご紹介させて頂き、その内七名の方の「お導き」が許されました。



ブラジル・グアラピランガ聖地に参集する信徒

浄霊が人の人生を良い方向へ変えていく様子を見ると、本当に幸せな気持ちになります。御教えの拝読と救世教の信仰実践が私の人生を一八〇度変え、明主様の歩みに倣うなかで、私は自らが進むべき道を見つけたのです。

それから私は自分のグループに所属する信者さんらのお世話をさせて頂くようにもなった他、マリリア浄霊センター青年部の責任者として約五〇名の青年たちをサポートする御用も許されました。青年部では青年たちが信仰を固め、将来御神業のお役に立てるよう、私がこれまで体験したごと、明主様から学ばせて頂いたこと全てをお伝えするようになっています。

心理的・情緒的問題はもうありません。今私は心軽く、穏やかに人生を歩んでいます。親を供養し、祖霊の救いに貢献する最良の道は、神業奉仕を通じて人々を幸せにすることだと学ばせて頂きました。

これからも私の救い主、明主様のお道具として地上天国の建設に全身全霊でお仕えしてまいりたいと思います。

救世教信徒であること、家族と共に信仰を实践するお許しをいただいておりますことを、大神様、明主様に感謝申し上げます。

ありがとうございました。

神戸み教え勉強会

各地からのおたより



真剣にみ教えを拝読、そして各々が感想を述べ合い学びを深めた

昨年10月開所した神戸須磨集会所では3月11日、み教え拝読会を開催しました。開所前から毎月行われてきている拝読会は、はじめに『世界救世教とは』を輪読し、その後、参加者の率直な信仰の語り合いを積み重ねます。開所後は淡路グループの会員も2ヶ月に1回参加できるようになりました。

回を重ねるごとに、集会も充実してきています。「家でもみ教え拝読出来るようになりました」、「布教所の時は、単独で参拝することが多かったですが、聖地直結の会に参加してからは、グループの皆さんと連絡を取り合い、思いを共有し、聖地を身近に感じながらお祈りするようになりました」、「明主様と聖地に繋がっているという安心感と喜び、充足感を味わっています」等々、飾らないありのままの学び合いが、拝読会を盛り上げている。

浄霊センターの心遣いのもと集会開催



鹿児島県信徒集会

会員が一堂に会するのは初めて。喜びの声が飛び交った



3月12日、西村代表、立石九州代表が出席し、鹿児島県信徒集会が開催されました。参加した会員は、明主様と聖地に繋がる確かな信仰を確信し、終始和やかな学び合い、語り合いの機会を楽しまれました。

(いづのめ教団鹿児島浄霊センターにて)

九州合同月次祭



厳かな雰囲気の中、式典が始まる



九州各地から一堂に集まることは日頃の御用の励ましになる



熊本・古賀の信徒に素敵なミニ花を

九州合同月次祭が、4月9日(日)田川布教所において開催されました。田川布教所、熊本集会所、古賀集会所、合わせて71名の信徒が参集しました。門柱責役、立石九州代表が出席し、会員と共に明主様のあつい御守護に感謝を捧げました。信徒を代表し、HAさんが感謝奉告(19頁掲載)。明主様に求める信仰を確かめ合う、熱気に包まれた合同祭典が繰り広げられました。

「ゼロポイントフィールド仮説」は神さまの世界②

高頭 和生

前回につづき、田坂広志著の「死は存在しない」（光文社新書）を取り上げさせていただき、そこに書かれている「ゼロポイントフィールド仮説」と「神さまの世界」を学んでゆきたいと思えます。ひと言でいうと、「最先端の科学が、宗教の世界、神さまの世界を説明しはじめた」という内容です。前回も、宇宙が生まれ時から量子真空という目に見えない波動の世界が存在し、そこに「ゼロポイントフィールド仮説」という、「宇宙がうまれてから現在までの全ての情報が存在している」という仮説の研究が、最先端の科学者によって進められているということを学びました。今回は、「私たちの意識とは、いったい何なのか」ということを掘り下げて行きたいと思えます。

現代の科学が直面する最大の問題のひとつは、「意識の謎」が解明できないことだと著者は言います。脳科学の研究が進んだ現代でも、「意識」や心、精神というものが、脳の作用か

ら生まれるものなのか、それとも「身体全体」なのか、それ以上の何かなのかが、明らかになっていない。私たちの「身体全体」が「ゼロポイントフィールド」につながっていると捉えると、「直観」、「以心伝心」、「予感」、「占いの中」、「シンクロニシティ」（共時性）、「コンステレーション」（身の回りで起こった出来事が何かのメッセージと受け止められること）といった身の回りで起こる「意識の不思議な体験」は、なぜ生まれるのかが解明できるそうです。さらに、「遠隔治療」という、遠く離れた場所から「治癒を祈る想念」を送ることによって、患者の治癒を促す治療法の効果を取り上げ、この説によって「病気の発生」や「病気の治癒」の問題に、まったく新たな視点を開くことになるだろうと書かれています。前回述べたように、「ゼロポイントフィールド」を「神霊界」（神さまの世界）と捉えると、私たち人間の魂は神さまに繋がっており、「遠隔治療」の究は、まさしく「浄霊」の研究と重なると感じました。

では、どのようにしたら「我々の意識が、ゼロポイントフィールドに繋がるのか」という、著書の内容をあげてみます。私たちが学ぶ御教えと重ねてみると、70年も前に明主様の仰つ

ていたことを「現代の科学者が解明し始めた」と、受け止められるかもしれません。

我々の意識は「5つの階層構造」になっています。

一段階目は「表面意識」です。我々の「自我」（エゴ）が中心になって働くため、不満や怒り、不安や恐れ、嫌悪や憎しみ、妬み怨恨などの「ネガティブな想念」が渦巻く世界だそうです。この「ネガティブな想念」は、「雑音」となって、我々の意識が「ゼロポイントフィールド」に繋がることを大きく妨げるそうです。

二段階目は、「静寂意識」で、日常の生活や仕事と離れ、「静寂」を保っている時です。この世界では、「自我」（エゴ）の活動は比較的、静まっております。「ネガティブな想念」も消えているそうです。私は、日々の参拝や浄霊実践を習慣化することが大切だという理由に重なりました。この「静寂意識」の世界では、自分を静かに見つめる「もう一人の自分」が現れてくると書かれています。「もう一人の自分」は、「自我」の動きを抑圧せず、否定せず、静かに見つめてくれて、「ネガティブな想念」が消えて行くそうです。その結果、「ゼロポイントフィールド」へ繋がりがやすくなり、そこから必要な情報や知識

や叡智を得ることができるようになると書かれています。

三段階目は、「無意識」の世界です。これは、「表層意識」や「静寂意識」の奥にある、我々自身が気付いていない意識の世界です。よく言われる「引き寄せの法則」の世界です。ゼロポイントフィールドを通じて、「類似の情報」を引き寄せるため、この世界に「ネガティブな想念」があると「ネガティブな情報」を引き寄せ、結果的に「ネガティブな出来事や出会い」を引き寄せて、「悪い運氣」を引き寄せてしまいます。逆に、「ポジティブな想念」があると、「ポジティブな情報」を引き寄せ、「ポジティブな出来事や出会い」を、そして「良い運氣」を引き寄せることができます。著者は「無意識の想念を浄化する」ことを、進めてられています。私は、「無意識の想念を浄化する」ための、いちばん簡単な方法は、「感謝の実践」だと思いました。「感謝の心は神に通じ……」と、明主様は想念次第で神さまに繋がることのできる「シンプルで簡単な方法」をお教えくださっていたのだと思いました。

四段階目は、「超個的無意識」とあります。ユング心理学では「集合的無意識」と呼びます。

この世界では、「ゼロポイントフィールド」を通じて、一人ひとりの「自我」や「賢我」を超え、さらに「無我」も超えた「超我」という自己が現れるそうです。「直観」や「シンクロニシティ」、「コンステレーション」はもとより、「以心伝心」など、私たちの心が繋がったように思える「超個人的な現象」が起こります。

第五の階層は、「超時空的無意識」の世界です。これは、「超個人的無意識」が、「ゼロポイントフィールド」に深く結びついた意識の世界です。「超時空的」と称するのは、「ゼロポイントフィールド」には、「過去、現在、未来の出来事の情報」が存在するため、我々の意識は、「個人」を超え、「空間」を超えた情報と共に、「時間」をも超えた情報とつながります。いわゆる「予感」や「予知」「占いの中」といった「未来を知る」という体験が起こるそうです。まさしく明主様があらわされた見真実の世界と言ってもよいのではないのでしょうか。

「意識の5つの階層」がどのように「ゼロポイントフィールド」に繋がりを、それによってどのように意識が深まるのかが、この仮説で理解できます。「ゼロポイントフィールド」は神さまの世界と重ねたほうが、解りやすかったの

ではないのでしょうか。そして、我々が日々取り組んでいる「参拝、浄霊、奉仕」という基本行も、「利他愛の実践」や「感謝の想念の実践」も、最先端の科学者が「良い運氣」を引き寄せる方法として裏付けているように解釈いたしました。

私は日常生活において、二段階目の「静寂意識」を常にもてるようになりたいと思えました。その為には、「感謝の実践」と共に、「自我」（エゴ）を無くす訓練を御教えから学び実践したいと思えます。

今回は、本書のタイトルでもある「死は存在しない」というメッセージを取り上げてみたいと思えます。
(つづく)

この連載は「明主様を求める」ひとつの切り口として紹介しています。会としてみ教え解釈の固定化を図る意図はありません。寛容にお読みいただければ幸いです。(編集者)

世界救世教 明主様と聖地に直結する会
(聖地直結の会)

〒413-0006

熱海市桃山町26-1 救世会館 1階

電話 0557 85 8060

FAX 0557 85 8185

seichicyokketsunokai@outlook.jp



甘酸っぱい苺は幸せの味